

足柄の旅 2020



2020年9月

旅のチカラ研究所 植木圭二

神奈川県西部の足柄地方に妻と2泊3日のドライブ旅行に行ってきた。神奈川県の観光地といえば大都会、古都、海などあるが、今回は山という側面からこの地方の魅力を紹介したい。

■きっかけは新型コロナウイルス感染症

私がかねてより神奈川県一周の旅を考えていたが、なかなか具体的な計画が立てられないでいた。その理由は神奈川県の魅力にある。その魅力とは神奈川県には何でもそろっていることだ。海、山、川、湖に始まり、大都市から地方都市そして山村まである。観光地は古都鎌倉、箱根温泉、湘南海岸、港町横浜など実に豊富だ。それは日本の縮図と言っても過言ではなく、企業が新商品を発売する前に神奈川県限定販売をして様子を見るということも多い。この日本の縮図をどうやって短期間に効果的な旅行体験できるかという結構難しいテーマが私を悩ませていた。

しかし新型コロナウイルス感染症によって、小田原、真鶴、猿島のように人の少ないマイナーな場所に行くようになって考え方に変化が出てきた。それは有名観光地に埋もれて私が知らなかっただけで、実は私はそういうマイナーな場所にあまり行っていないことが分かった。

そこで今回の旅は神奈川県でも最もマイナーだと、私が勝手に思っている足柄地方を選んだ。

足柄とは私のイメージでは県西部の南足柄市とその北にある山北町で、南足柄市はその名のとおり、山北町も正式には神奈川県足柄上郡山北町なのでこちらも立派に足柄を名乗っている。

この南と北の足柄に一泊ずつ泊まる旅を企画した。交通手段は機動力を優先して自家用車を選び、妻と熟年夫婦のドライブ旅行に出発した。

■金太郎伝説の地

足柄と言えば真っ先にこの人の名前が浮かぶ“金太郎”伝説の地を目指すことにした。

その金太郎について辞書でひくと、平安時代中期の源頼光の家来の四天王の一人で坂田金時の幼名という。足柄山に住み、獣を友として育った怪力の持ち主とある。

最初にやって来たのは「金太郎の遊び石」と呼ばれる高さ3m以上はあるだろう巨石だ。石は2つあって、案内看板を読むと看板の前にあるのが「たいこ石」で、奥の田んぼの中にある草に覆われているのが「かぶと石」と書かれている。

いくら怪力の持ち主といえども、この石を自力で、あるいは熊の力を借りても持ち上げることも転がすことも不可能だからせいぜい石の上に乗って遊んだということだろう。



<金太郎の遊び石 正面がたいこ石、右奥がかぶと石>

遊び石のすぐ近くには金太郎の生家跡があり家の土台の石が綺麗に残っている。平安時代から既に 1000 年も過ぎており、昔の土台が整然と残っていることにはささかの疑問も感じるが、そんなことは大目に見て、これも良からうという気持ちになる。

そんな気持ちさせてくれる理由は、神奈川県民としては昔話の主人公が地元で育ち、住んでいたことに何となく誇りを感じるからだ。

私がそんなことを考えていたら妻の口から出た言葉が印象的で、「日本の民話で実在した主人公は少ないのよ。桃太郎は桃から生まれ、一寸法師は身長 3cm とか、実話は金太郎だけ」と言っている。私もそれに全く同感だ。だから親近感が湧くのだろう。



<夕日の滝 左の端に妻が立っている>

近くにある金太郎が産湯を浸かったという「夕日の滝」にやって来た。金時山を水源として高さ 23m、幅 5m という立派な滝で、さすが金太郎は産湯もスケールが違うと感心してしまう。

確かに滝壺は産湯として使えそうになっているから案外本当かもしれない。

金太郎伝説は、神奈川県だけではなく隣接する静岡県小山町にも存在する。金太郎にはつきもの金時山は神奈川県と静岡県との県境にあり、さらに JR 御殿場線の足柄駅は小山町にある。現在はたまたま県境によって分けられているが、かつてはこの付近一帯が足柄という場所だったことを意味している。

そしてこの地域は駿河の今川、相模の北条、甲斐の武田の勢力の間に位置して、どこの領地になってもおかしくない場所だ。きっと時代によって領主も変わったに違いない。

従ってこの地は交通や軍事の要衝になっており、足柄峠を越えて直ぐのところには足柄城跡がある。山城なので高台にあり見晴らしがよく、彼方に富士山を望み、近くに金時山を見ることができる。城跡といっても遺構はなく、平らな野原になっている。

現在の県境は足柄峠なので、この足柄城跡は正確には静岡県小山町になるのだが、ここに面白い看板が立っている。看板には「毎年9月の第2日曜日に南足柄市と小山町との共催で行われる笛まつりにおいて、両自治体で競われる“領地争奪綱引き合戦”の勝者が翌年の笛まつりまでこの地を領地とする」と書かれている。第2日曜日は先週のことなので今年は南足柄市が勝ったようで「相模之国南足柄領」と書かれた看板が立っている。

毎年領地を決めるために綱引き合戦とは実に面白いことをやっている、私も妻も感動しきりだ。こんなことも金太郎というヒーローあつてのことかもしれない。



<足柄城跡 右端にあるのが説明看板>

<説明看板>

■大雄山最乗寺は凄い

小田原駅から出ている伊豆箱根鉄道の大雄山線という鉄道は私も名前を知っているが、残念ながら乗ったことがない。その鉄道の終点になる大雄山駅に初めてやって来た。そしてここから約3km先にある曹洞宗の大雄山最乗寺を目指して車を走らせる。

駅前には電線が地中下されており、綺麗な街並みが続いている。門前町として整った街並みに驚いて、私と妻は「こんな田舎の街なのに立派だよ」などと車内で言葉を交わしている。それまでこの土地さえも知らなかったことを棚に上げて、きっと地元の人が聞いたなら間違いなく憤慨するだろう。

最乗寺に近づくとつれてさらに驚きは連続する。うっそうと茂った太い木々の中を道が続いており、その重厚感が歴史や威厳を感じさせる。私たちの車の前には最乗寺に行く路線バスが走っており、大型バスが悠々とすれ違うことができるように車道は整備されている。車道は山道なのでくねくね曲がって登っていくが、人が歩く昔からの参道は石段と石畳の道で真っ直ぐに最乗寺に向かっている。その参道をゆっくりと踏みしめながら歩いて寺に向かう参拝者も見かける。そしてこんな山奥の寺に 250 台もの自家用車を停めることのできる舗装された無料駐車場も用意されているから驚きだ。だっ広い平地ならばいざ知らず、寺は山奥の斜面にあるのだからこの整備には相当に金がかかっている。

境内に入るとその大きさにまた驚く。恥ずかしながら私はこの地にこんな立派なお寺があることを知らなかった。

この寺は 1394 年建立で、開祖は了庵、実際に建設の指揮を執ったのは弟子の道了だと案内看板に書かれている。そして道了は了庵の死後に天狗になったという天狗伝説も残っている。天狗にちなんでか大きな高下駄が奉納されており、大きいものから小さいものまでさまざまな下駄があって奉納した企業名や個人名が書かれている。



<境内の中心部>



<奉納された下駄>

この寺は多くの寄付によって成り立っているようで石碑や灯籠に「金三千円、明治〇〇年」などと書かれている。3000 円といっても明治時代と現代では貨幣価値が全く違う。調べてみると明治 30 年の 1 円は現在の 3800 円相当というから 3000 円は 1140 万円か、これは凄い。

その豊富な資金によるものか、境内の絵図を見ると立派な堂や塔、門などが沢山ある。奥の院まで行けば途中でそれらを見ることができるので奥の院を目指して歩き始めるが、これが結構な距離で最後は延々と石段を登ることになる。石段の数は 700 段と書かれているから、日頃ウォーキングで鍛えているつもりでもかなり大変な思いをして奥の院に到達した。

奥の院は私たちが温かく迎え入れるように鎮座し、「ようやく来たか」と言っているようだった。

驚きの連続のこの寺には何か心惹かれるものがあり、大自然の中に悠然と存在する寺に身を置いて心なしか精神的に落ち着いたような気分になった。

最後にパンフレットにあったこの寺の大きさを列挙しておくとも面積 128 ヘクタール（東京ドーム 27 個分）、杉の木は 17 万本、石塔 621 基、建物 44 棟、門の数 6 門・・・本当に凄い。

■森の中の宿泊

大雄山最乗寺の近くに本日私たちが泊まる「おんりーゆー」という比較的新しい日帰り入浴施設がある。ここは日帰り入浴が主体だが、泊まることもできる。

この施設の特徴は何と言っても立地環境にある。森林の中にたたずむ建物は、自然に同化するような感覚で入浴や休憩ができる。

中庭の林の中に浮島のようなウッドデッキがあって、そこにはハンモックがいくつか置かれている。それを囲むように回廊があって、回廊の一部がせり出してウッドデッキになっている。もちろんそこにはリクライニングチェアや飲み物を置くテーブルもあるが、そこに身を置かなくてもこの光景を見ているだけでも十分に癒される気分になる。

妻はこの施設がたいそう気に入ったようで、来たばかりなのに今度は誰か誘って来ようなどと次回の話をする始末だ。



<中庭を臨むウッドデッキ 中央にハンモックが見える>

風呂に行くと内湯と露天風呂があって、どちらにも大きな湯船が2つずつある。2つの湯船の温度が異なっており、ぬるい方の湯に浸かっていればいくらでも長湯ができるようになっている。この施設がお客様に何を提供しようとしているのかがよく理解できる。

露天風呂は高い木々の中であって森林の中で入浴しているような気分させてくれる。露天風呂の湯船の縁の部分は頭を乗せるのにちょうど良い高さ加減の石でできており、それを枕にして上を見ると木々の間に広がる青空を見ながらの入浴になる。この光景、この感覚は実に素晴らしい。単に開放的な露天風呂は他の温泉地でもよく見かけるが、これだけ森林の中に居ることを感じさせてくれる露天風呂は珍しい。

露天風呂から10m程離れた場所には小さな小川が流れており、森林と青空に小川のせせらぎと鳥の鳴き声も加わり、これはもはや筆舌に尽くしがたい。



<露天風呂 森林の中の2つの湯船>

宿泊用の部屋は全部で5部屋しかない。私たちの部屋は16畳の和室で、2人ではさすがに贅沢な広さになっている。おまけに各部屋には庭とウッドデッキがついていて、そこには一人サイズの



<泊まった部屋 庭の露天風呂>

の小さなバスタブの露天風呂がありカランも付いた簡単な洗い場もある。それ以外にガラスで仕切られた簡単なシャワールームもあるから凄い。

日帰り入浴が主体なので夜間は施設が閉館すると宿泊者は入浴できないために用意されているようだ。

さて夕食は、日帰り入浴施設でよくある〇〇定食を少し豪華にしたといったところだが、それでも陶板焼き、刺身、天ぷらも付いており、必要にして十分な夕食になっている。

コーヒーは食事時間だけでなく入館中は飲み放題になっており、妻はこのサービスについてもたいそう気に入っている様子だった。

■南足柄市は元気な街だ

宿でもらったパンフレットを見ると宿の周辺には森林をテーマにした面白そうな施設がたくさんある。翌日はそれらの施設を後学のために見学することにした。

宿に隣接している足柄自然公園「丸太の森」は、昨夜泊まったおんりーゆーと経営母体が同一の施設になっている。

この自然公園は広く、山ひとつが公園になっているといったものだ。総面積は24ヘクタール、外周は約3kmという。昨日の大雄山最乗寺の敷地は128ヘクタールで東京ドーム27個分だったので、それには及ばないものの東京ドーム5個分はかなり広い。

入口にある案内地図を見ると、おおよそ森の中の遊びと言えるものは何でもそろっている。大自然に囲まれた散策路、全長1060mもある木と木の間をロープに滑車を付けて渡るジップライン、野外ステージ、野草園、植物園、BBQ会場、キャンプ場、催し物に使われる古民家、資料館になっている旧福沢小学校の木造校舎もある。

私たちはその中でも特に珍しい「森の空中遊びパカブ」を見せてもらった。平日の朝ということもあってお客はまだおらず、スタッフが率先して案内してくれた。

パカブとは、フランスの小さな島の漁師たちが漁に使う網を空中に張って遊び空間を作ったのが始まりで、全てが空中にあるというのが特徴だ。森の中に張り巡らされた網で作った空中広場、吊り橋、空中迷路、空中で行うミニサッカー、バドミントン、ドッチボールのコートなど。全く斬新な空間になっているとスタッフが力説している。とにかく子供たちに人気があり、同伴の親はすぐに疲れて降りたくなるが、子供たちは体力の続く限り遊んでいくと言っている。確かにこれは面白そうな施設だ。

スタッフの話では、この規模のものは日本にはここしかなく、メンテナンスのために本場フランスから専門技術者が来ているという。



<パカブ 空中に張った網>

丸太の森に隣接して神奈川県立の「ふれあいの村」がある。受付で見学をしたい旨を申し出て中に入れてもらった。こちらは林間学校と言った方が分かり易いだろう。立派な管理棟、集会棟があって広場、宿泊棟やコテージがそろっている。小中学生が学校行事で泊まることを前提にした施設である。

パカブで案内してくれたスタッフに今回の旅行のこと、足柄地区を知りたい旨を話すと最近オープンした「道の駅足柄 金太郎のふるさと」を紹介してくれた。

その道の駅に行ってみると広い駐車場に入るのに車が渋滞している。平日の昼間というのに私も妻も驚くばかりである。私たちもその駐車待ちの最後尾に車を付けてようやく中に入ることになるが、直売所も食事処も混んでいる。

直売所では採れたての農産物が安くて人気で、地元の人たちが列をなしている。私たちは土産物を見て回った。ここの土産物はやはり金太郎が主役で、金太郎をあしらった饅頭、Tシャツ、バッグなどが並んでいる。その中で金太郎は英語名「ゴールデン・ボーイ」と称されており、キャラクターの絵が実に個性的で面白かったのでゴールデン・ボーイ・クッキーを衝動買いしてしまった。



＜ゴールデン・ボーイ・クッキーの包装＞

2日間過ごした南足柄市は実に元気な街という印象だ。金太郎の元気が街や住民に宿っているかの如くであった。

■山北町に来る

私の運転する車は南足柄市の北に隣接する山北町に入ってきた。この旅行に出る前に山北町役場のホームページを覗いてみたら、町の観光名所は「河村城跡公園」と「洒水（しやすい）の滝」と書かれていた。

早速、小高い山の上にある河村城跡公園に行ってみる。このような山城が多い理由は、この辺りは昔から北条、今川、武田による領地のせめぎあいがあったことを物語っている。

城跡といっても草が生い茂っている草むらで、荒野と言った方がいいかもしれない。どうやらかつて山北町が整備して観光名所にしようとしたが、観光客も住民も訪れないので名所になりきれずに荒れ果てたというところだろう。かろうじて説明看板が残っていて、郭（くるわ）や空堀の発掘跡とあるが、深い草むらに覆われていて何だかわからない。

この光景を見ていて、ふと思ったのは1911年に草に覆われたインカ帝国のマチュピチュを発見した探検家ハイラム・ビンガムのことだ。彼がマチュピチュを発見した時は草ぼうぼうでとても遺跡に見えなかったという。おっと話がそれたが、願わくは足柄のマチュピチュになって欲しい。

もう一つの観光名所の洒水（しやすい）の滝は河村城跡の近くあって、日本の滝百選に選ばれているという名瀑だ。駐車場に車を置いて歩くこと5分でその名瀑が見えてくる。滝の近くには湧き水もあって「名水百選 洒水の滝」の看板が出ている。私たちは大自然で浄化された名水を飲んだ。名水はもちろん冷たくて美味かった。

滝は三段の滝になっていると書かれていたが、私が見る限りでは一段にしか見えない。落差は一の滝は 69m、二の滝は 16m、三の滝は 29m というから 3つ合わせると 114m になるから相当に高い。ちなみに高さだけで比べると日本三名瀑の日光華厳の滝が 97m、那智の滝が 133m、袋田の滝が 120m とうことで、決して引けを取らない。

この滝も私が神奈川県に住んでいながら初めて訪れる場所になる。神奈川県在住で旅行を生業にしている者としていささか恥ずかしい気持ちになるが、まだまだ地元でも行ったことない凄い所が残っていることを痛感する。

■中川温泉の老舗旅館に泊まる

山北町のほぼ中央に丹沢湖があり、その北に位置する中川温泉にやってくる。今宵の宿はその温泉地のほぼ中心にある「信玄館」に泊まることになっている。

妻が「ここは山梨でもないのに信玄？」とつぶやいている。私とその疑問に答えるべく「足柄地域は今でこそ神奈川県だけど、昔は相模の北条、甲斐の武田、駿河の今川の勢力がぶつかるところでその時々によって領主が変わっていた証拠だよ」、そしてさらに「信玄の隠し湯を名乗ることで名湯の証明になる」と付け加えた。妻は納得したらしい。

信玄館は河内川の溪流沿いに建っている。従って宿に入ってロビーからは溪流越しに山々が見えると思っていたらロビーの先にも建物がある。その手前は立派な中庭になっており、その中庭には池があって大きな鯉が悠々と泳いでいる。

この和の風情がお客に安らぎを与えてくれる。なかなか考えられている演出だ。



<ロビーから見える中庭>

そんな風情溢れる宿だが、この宿の特徴は何と言っても温泉だ。風呂は男女別大浴場と貸し切り風呂が 3つ、男女入れ替え制の露天風呂がある。

私たちは全ての風呂に入浴すべく、まずは立て続けに貸し切り風呂に入る。湯殿の扉を開けるとかすかな硫化水素臭がする。昨日の「おんりーゆー」ではなかった臭いだ。私はこの温泉独特の硫化水素臭が好きで、これだけで評価ポイントがアップする。

3つの貸し切り風呂にはそれぞれ個性があって三者三様になっている。手作り感のある木製の鹿の親子のオブジェがある風呂、丸い木の浴槽が暖かみを感じる風呂、窓が全て開放できる露天風呂気分を味わえる風呂がある。

実は最初にフロントで貸し切り風呂のお勧めを聞いたら、「当館の貸し切り風呂はどれもお勧めです」と言っていたことを実際に入浴して納得した。

どの風呂にも洗い場にカランが 2つあり、2~3人は楽に入浴できる広さになっている。そして必ずベビーバスが用意されているので、幼い子供連れにはありがたい。



<木製の鹿のオブジェのある風呂>



<丸い木製の湯船の風呂>

男女別大浴場は内湯の他に溪流と対岸の山並みを眺めることができる露天風呂があって、その露天の湯船は寝湯になっているのでのんびりと青空を見て溪流のせせらぎを聞きながら湯に浸ることができる。

サウナもあるが残念ながら水風呂がない。私は高温のサウナから冷たい水風呂に入る瞬間こそがサウナの真骨頂だと思っているので、水風呂がないのは片手落ちでいただけない。



<大浴場の露天風呂>

男女入れ替え制の露天風呂は左右に脱衣場があって、湯船の真ん中に中途半端なしきり板があり湯船の一部が繋がっている構造になっている。昔はこの露天風呂は男女混浴だったと容易に想像できる。今は混浴ではなく時間入れ替え制にしているが、私の勝手な希望としては混浴のままにして女性専用時間を設けた方がいいだろう。実際に混浴になることは滅多にないが、それでも何となくワクワク感が生まれる。

驚くことにこの宿にはプールがある。長さ 15m という温泉宿にしては結構広い立派なプールに幼児用の浅いプールが併設されている。プールの水は温泉を使用しているというから源泉の温度と同じ 33℃くらいだろう。

私たちが館内散策をしてプールを覗いた時には若い女性客 2 人組と小さな子供を連れた家族連れが泳いでいた。山奥の温泉に来てプールとは、しかしこれも子供連れには受けがいいだろう。

この宿は中川温泉の中では老舗旅館で、夕食も朝食もそれなりに豪華な料理が出てきた。味は普通に美味しいが、残念ながら料理については特徴やインパクトがない。

ただ食事の世話をしてくれる仲居さんが親切で優しく、年の頃ならアラフォーの清楚な感じの女性だ。もちろん彼女から町のことや中川温泉のことをあれこれと聞くことができた。

■驚きの丹沢

旅の最終日は丹沢湖周辺ドライブになる。

最初に立ち寄ったのは宿から近い箒杉（ほうきすぎ）で、例の清楚なアラフォーの仲居さんから聞いた名所だ。幹の周りが 12m という巨木で全国名木百選に選ばれており、推定樹齢 2000 年というからパワースポットになっている。

丹沢湖は 3 つの川が交わる場所をせき止めたダム湖で、3 つの川が交わるためなのかこの地域は三保と呼ばれている。そのためダムは三保ダムと命名されている。丹沢湖の畔には丹沢湖記念館があり、記念館の隣には三保の家という古民家がある。この古民家はダムができる際に湖底に沈む家を移築したものだという。

三保の家は良く整備されており無料開放されて見学自由になっているのがありがたい。建物そのものも見るべき価値があるが、家の土間に展示してあった“ある展示物”に妻がえらく反応して感激している。

それは「桶の洗濯機」と書かれている。手動の洗濯機で、桶にハンドルが付いていてそのハンドルを手で回すと水流が起きて洗濯するという電気洗濯機の原型とでもいうものだ。確かにこれは相当に珍しい。



<三保の家>



<桶の洗濯機>

もう一つ珍しくてちょっと感動するものが三保ダムにあった。三保ダムはロックフィルダムという構造をしており、堤防は石を盛ったなだらかな丘のようにできている。日本のダムの 1/10 はこの構造をしているが、一般的に日本人が持つダムのイメージは垂直に反り立つ壁なのでロックフィルダムはあまり馴染みがない。

そんな構造なので堤防の上は広くなっており、ちょっとした広場が堤防の真ん中付近にある。そこには方位盤や説明看板があって、近寄ると人感センサーが働いて自動で音声が出てダムの説明をしてくれる。この音声は地元の小中学生たちの録音で、小学生の目線でダムや町のことを紹介してくれる。私はその説明に聞き入ってしまった。



<三保ダムの堤防>

河内川の上流に行く。驚くことにキャンプ場のオンパレードになっている。いくつものオートキャンプ場があり、どれも比較的大規模で設備も整っている。例の仲居さんがわざわざ食事の時に持って来てくれた山北町のパンフレットにはキャンプ場だけでも 10 カ所以上ある。

私も河内川下流のキャンプ場には子供たちが小さい時に何度も来たが、当時は上流にはキャンプ場はなかったような気がする。おそらくは最近急増したようで、その証拠にキャンプ場の名前はカタカナの外国風のお洒落な名前が多い。ここは都会から近く便利な立地で人気がありそうだ。

県立の西丹沢ビジターセンターに立ち寄る。ここを拠点に西丹沢の山に登る登山者が多くいて、神奈川県警松田警察署の山岳救助隊の事務所もここにある。私たちが訪れた時にも何人かの登山者が登山届を出していた。

若い女性 2 人組はこれから溪流沿いに大小の滝を見に行くというのでビジターセンターの職員からコースを詳しく聞いていた。往復約 2 時間半の手頃なトレッキングで、最も奥まった処にある本棚という滝は高さ 60m もある名瀑だという。私も職員の話の横で聞いていたら是非その滝を見に行きたくなった。

■足柄の旅を終えて

南足柄市も山北町もどちらも大自然の中で金太郎伝説と隣接する 3 国のせめぎあいの歴史が残っていた。大自然と共存ということではどちらも同じだが、南足柄市は大自然に人間の文化を持ち込んだという感じがする。だからお寺やアスレチックが印象的だ。山北町は大自然に人間が挑戦するというもので川や滝、山といった場所でトレッキングや山登りを楽しんでいた。

今回の旅を終えて、地元でありながら知らない場所が多いということを思い知った。この調子では行き尽くしたと思っているメジャーな横浜、湘南、鎌倉、箱根などでも多くの未知の場所があり、マイナーな観光地でも面白い場所がまだまだ残っていることになるだろう。

それはきっと日本の縮図の神奈川県だけでなく、日本全国でも同じことが言えるかもしれない。

そしていつしか神奈川県魅力を最大限に引き出す神奈川県一周の旅を実現させたい意欲も構想も湧いてきた。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っ各項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

総合点（平均値）で5段階の75%、つまり3.75をオススメの目安としている。特に4.00を超えることは驚き感動が少なくとも1項目以上あるからオススメ度は高い。

おんりーゆーは泉質3、風呂5、料理3.5、コスパ4、サービス4、建物・部屋5、立地環境4.5、総合点4.14になった。泉質は低張性アルカリ単純性、pHは10.1、湧出温度は32℃となっている。

信玄館は泉質4、風呂4.5、料理4、コスパ3、サービス4、建物・部屋3.5、立地環境4、総合点3.86になった。泉質は低張性アルカリ単純性、pHは10.2、湧出温度は33℃となっている。

■旅の記録

実施は2020年9月17日（木）～19日（土）の3日間、その行程を以下に示す。

- ・1日目 10時30分自宅を出発し途中で昼食を取り、金太郎伝説の地、足柄峠、足柄城跡、足柄万葉公園、足柄明神、大雄山最乗寺、15時30分おんりーゆー到着
- ・2日目 11時宿を出発、丸太の森、ふれあいの村、道の駅足柄、川村城跡公園、酒水の滝、鯛焼き製造販売ハマセイ、おかべ酒店、15時30分信玄館到着
- ・3日目 10時宿を出発、箒杉、西丹沢ビジターセンター、丹沢湖記念館、三保の家、三保ダム、昼食を取り15時帰宅

費用はGo To トラベルキャンペーンを適用させた結果、2人で約4万円になる。内訳を示す。

- ・宿泊費 おんりーゆー15370円（2人分）
（1泊2食11000円×2＋入湯税・飲み物代－GoToキャンペーン7700円）
信玄館20320円（2人分）
（1泊2食14850円×2＋入湯税・飲み物代－GoToキャンペーン10395円）
- ・昼食代 1日目から3日目まで3食合わせて2人で約2500円
- ・交通費 約1500円（有料道路を使わずガソリン代のみ）